

# 万行寺寺報

Mangyoji Jiho

発行

浄土真宗本願寺派  
万行寺 山崎信充

〒385-0003

長野県佐久市下平尾 4 6 1 - 1

電話 0267-67-2460



## ■住職法話

大切な方を亡くすということ

## ■～結ぶ絆から、広がるご縁へ～ ごえん

## ■本願寺の本

ぼじょう しんらん そとまつ た え こ  
「慕情 私の親鸞さま」外松太恵子

## ■くらしの仏教語豆事典

## ■編集後記

## Photo

実りの秋。リンゴは長野県を代表する果物です。品種も多様になり、秋映、シナノスイート、シナノゴールドを“りんご三兄弟”と名付けてPRしているそうです。

# 住職 法話

## 大切な方を亡くすということ

葬儀のお経の後、法話をさせていただきますが、「〇〇様は、阿弥陀如来に導かれ浄土へ往生されました」と、決まったお話になってしまいます。変わらないお話で、ある方には樂觀的に捉えられているのではと心配してしまうこともあります。

それは、大切な方との別れによるご遺族の悲しみや苦しみを乗り越えられるようなこととばが見当たらないこと、また、亡くなると同時に、通夜、葬儀といった儀礼的な席が待ち構え、そんなことを考えられる余裕が無いからでしょう。しかし、決まったお話でも大切な仏の教えをしつかり

お伝えしています。ご遺族にとりましては、問題は、その後なのでしよう。ある方にとっては、突然の出来事で無力感を感じてしまったり、故人がどんな思いで亡くなっていたのかということとを考える方もおられるでしょう。

この十月二十四日付の信濃毎日新聞に、作家の大江健三郎さんが「晩年様式集」という新作を出版したという記事を見ました。東日本大震災と福島原発事故後に始めた文芸誌への連載によるものです。記事によりますと、「無力感の中の樂觀」と題して、震災や事故によるどうしよう

もない無力感の中で、それでも生きていこうという未来への希望を表現した作品のようです。

考え方や思想に関しましては様々な見方があると思えますので控えますが、その中でも、「死者の言葉を考えることは、生きている人間にとつて非常に大切なこと。それは僕の根本的な文学観の一つ。『あなたが『翻訳』した死者の言葉は正しくない』と批判されれば、理解したこと浅さ、ゆがみを発見できる。そのようにして死んだ人のことを理解していくのではないか」という視点には私も共感できるところがあります。

葬儀を通して、亡くなられた方やご遺族のことを何一つ知らない私が、「必ず救われていますよ。ご安心を…」などと軽々しく言えるものではないと考えるからです。

浄土真宗の救いを端的に表現すると、

本願を信じ念仏もうさば仏になる  
 という『歎異抄』のおことばです。心から本願を信ずることとは難しいですが、故人の手柄やご遺族の思いなどを感じの中で、仏さまからの願いである「本願」に通ずるものがある。初めて「救われている」と、心落ち着かせることばがかけられるのでしよう。



～結ぶ絆から、広がるご縁へ～

ごえん

①「ごえん」人と人を結びつける不思議なめぐりあわせです。

私たちには、さまざまな縁（原因）がはたらいています。そして、そのことを、知り尽くすことができません。今、ここで起きている事柄は、数え切れない無限の原因が積み重なった結果です。私たち人間の浅はかな考え方では、到底、理解し尽くすことができません。

一方で、因果関係でものを見ることは、私たち人間に特徴的な思考方法でもあります。しかし、私たちには、本当の因果関係を正しく見極めることができず、自分の都合で因果関係を見てしまいます。これは誤った認識であり、それによって誤った行為が生み出され、悲しみや苦しみの要因ともなります。

縁起を見ぬくことができず、自己中心的な考えで、結果に対して誤った原因を見てしまう私たちは、仏さまに出あい、その智慧をともしびとしなければ、私自身をきちんと見つめることさえできません。

仏さまが示された「縁起」とは、物事の正しい因果のことです。この教えをよりどころとして、思い込みや自己中心的な因果関係を見てしまわないよう、常に注意しなければなりません。

あなたと私も、そして仏さまと私も、人間のはからいでは知り尽くせない多くのご縁でつながって、不思議なめぐりあわせがあって、ここに出あっているのです。

# ～本願寺の本～

## 「慕情 私の親鸞さま」

外松太恵子 著／本願寺出版社 刊／定価:1,260円

著者・外松太恵子が、母として、カウンセラーとして、親鸞聖人を慕う門徒として、全国各地に残る親鸞聖人ゆかりの地を旅し、その生涯をしみじみと味わう。月刊誌「大乘」の連載をまとめた、豊富なカラー写真で楽しめるご旧跡ガイド。(本願寺出版社HPより)



くらしの仏教語豆事典 1 仏教の愛には二種類ある

### 愛「あい」

バレンタインデーに、女性が愛する人にチョコレートを贈るようになったのは、いつからのことなのでしょう。とにかく、街には愛のチョコレートがあふれています。

この「愛」が仏教語です。

仏教では「一切苦悩を説くに愛を根本と為す」と『涅槃経』にあるように、「愛」は迷いや貪りの根源となる悪の心のはたらきをいいます。「愛」のサンスクリット語「トリシュナー」の意味は「渴き」です。のどが渴いたときに水を欲しがるような本能的な欲望で、貪り執着する根本的な煩惱を指します。

愛欲、愛着、渴愛などの熟語は、そのような意味をもつています。

一方、仏教では、このような煩惱にけがされた染汚愛ばかりでなく、「和顔愛語」のように、けがれていない愛も説かれています。仏・菩薩が衆生を哀憐する法愛がそれなのですが、この場合には、たいてい「慈悲」と呼ばれているようです。

チョコレートをもらったばかりに、愛のしがらみに苦悩を深めている人はいませんか。

「辻本敬順 著／本願寺出版社 刊より」

### 編集後記

前号の「ごえん」に続いて、「くらしの仏教語豆事典」を始めます。◆よく耳にする仏教語を解説するとともに、あれもこれも仏教語だったのかと気付かされることばも出てきます。あいうえお順になっていて、誰かに教えたくなる雑学として気軽にお読み下さい。◆十月二十七日は恒例の万行寺報恩講をお勤めさせていただきました。毎年、十月の最終日曜日の法要となっております。台風の影響を心配しましたが、台風一過の秋晴れになりました。

